

ユニットテーマ No.11, 18, 22, 34 合同会合議事録

日時 2021年6月11日(金) 13:30-16:25 (Zoom)

出席者: 三浦, 高山, 長谷川, 横山, 石黒, 宇佐見, 伊藤篤史, 沼波, 永岡, 陰山(神戸大学), 石崎, Jialei Wang, 藤堂, 登田, H.Wang, 佐藤, 樋田, 森高, 水口, 山口, 仲田, 吉田(所長), 市口, 河村, 大谷, 高田

司会進行: 宇佐見

1. 課題紹介

No.34, No.11, No.18, No.22 の研究テーマ紹介があった。(No.34 はユニット構築会議発表前なので10分、それ以外は発表済みなので2分ほど)

2.ブレインストーミング

(1) アカデミックな視点

- ・ 司会から、「各テーマの補強・改良すべき点は?」「複数テーマが合同する場合の考え方」「仮に4つの課題が合同するなら、どんな考え方があるか?」「上位テーマとして1つの現象あるいは概念を用意し、それが内包する各テーマを研究する形はどうか」が提示され、それらについて議論が開始された。
- ・ 「対称性の破れ」の概念をテーマとした研究提案があったが、古い概念なので再検討の必要があるとの意見があった。
- ・ 「注目されるには宇宙プラズマ」という意見があったが、NIFSで宇宙研究をする理由、NIFSらしさは何か」という質問があった。
- ・ 吉田所長から、「NIFSらしさ」について、以下のコメントが出た。

NIFSは元々名大プラ研としてスタートした。かつては学問が大きくくりざされて、現在のように細分化されていなかった。戦後すぐに発足した2つの研究所、東大核研と名大プラ研は、それぞれマイクロとマクロの面を担っていて、核融合は名大プラ研の(現在でいうところの)1ユニットだった。核融合は当時は10年で実現すると思われていたが実際はそうではなく、多様な学問なので、分節化してほしい。核融合研の役割は、モノの有り様をマクロの文脈の中でとらえることである。他方、開発研究で「パラメータをどこまで伸ばす」は学術にはならない。ほとんどの学術分野では、10年毎でテーマ設定をしている。新しい景色が広がるように、NIFSならでは、すなわち核融合の太古に戻り、大きくくりで考えられる研究テーマを分節化してほしい。他の研究の後追いではなく、新しいものに挑んでほしい。我々はマクロな物理としてモノの有り様を考えることを我々のアイデンティティーとするが、実際には、原理ではなく現象論でも方法論でもよい。
- ・ 他の分野からわかってもらいたいなど控えめな目標ではなく、学問をリードしてほしい

という意見があった。

- ・ 「核融合研ならでは」について、NIFS 設立当初の理論・シミュレーション研究センターでは、かなり広い観点から研究を行っていたわけだが、違和感がないのは最先端の研究を行っていたためではないか、という話があった。

(2) 組織論的視点

- ・ ユニット制にあたって、自分自身の研究テーマとユニットの研究テーマのエフォート割り振り、どれくらいユニットテーマに拘束されうるか、などの議論があった。それに関連して、自分のテーマを変える・変えないということで、咎められる（怒られる）可能性があるのでは？という質問があった。
- ・ 吉田所長からは、まず自由意志で行動してその上で多人数で合意してほしい。研究内容で怒られるということはない、研究のプロなので評価はされる、という話があった。
- ・ 自分の研究がユニットテーマにどれくらい拘束されるのか、準備室で回答をいただけないか、との要望があり、それを所長や研究所が定義することはない、という回答があった。